

“老い”を支える「介護予防のあり方」に関する研究

—介護予防を目的としたミニデイサービスのアクティビティ・
プログラムの評価に関する実践研究—

塩 野 敬 祐

(2004年10月15日受理)

要 約

地域の連帯が希薄化していると言われている今日、全国で、住民主体による高齢者の介護予防を進める活動が活発である。誰にでもやってくる「老い」という問題は、それだけ自らの問題として差し迫って感じられるものなのであるが、かといって、一般住民が「老い」ということとその予防方法について熟知しているわけではない。本研究は、そうした手探りの活動をしている活動者たちに対して、よりの確な援助がなしうるような具体的サービスのモデルを提示することを目標とする。三ヵ年計画の本研究にあって、特に初年度は、プログラム活動の企画・運営について毎回の記録をもとに紹介し、また、それぞれ評価して留意点を説明した。この研究成果は、製本して関係団体に配付することになる。

キーワード 介護予防、アクティビティサービス、ミニデイサービス、住民の主体形成

はじめに

全国津々浦々、住民によるミニデイサービス（託老所と呼ぶ地域もある）が普及している。これは、デイサービスの待機者対策であったり、介護保険の非該当者（自立と認定された人）対策であったり、さらに、独居老人の見守り対策ともなっている。特に、ゴールドプラン21は活力ある高齢者像を目標とし、元気高齢者づくりの介護予防を推進する。

本調査が取り上げる『板橋・ふれあい21』という団体は、東京都板橋区において10年前からそのような視点から、地域住民によるミニデイサービスを開始した。これは板橋区内でも先駆けの一つとなったが、本会の独自性はそれにかかわる住民に対する研修プログラムが体系だった本格的な内容であるということである。生涯学習の視点から女性教育あるいは社会還元型学習の実践を行い、それによって地域福祉における住民の主体形成を実現したということである。

また、制度の隙間を一時的に補充する実践を行なう一方、先駆的な実践の記録をま

とめ報告書として行政機関に提出し、政策提言を行なっていることも特筆に価する。絶えず行政と住民組織・NPOとの協働のあり方を模索し、公私の役割分担によるぎりぎりのサービス創造を行なってきた。

しかし、全国的にも、板橋区内の他の団体をもても、介護予防の柱ともなっているミニデイサービスは一般住民によって運営されており、その質の確保と、そのサービスの向上のための実践研究が求められている。事実、平成15年6月に高知県で開催された地域福祉学会においては、各地の「生きがい対応型デイサービス」の事業評価に関する研究発表があった。例えば、長野県茅野市のフィールド・スタディは、「介護予防と自己実現サービス・プログラムの開発と評価に関する研究」と題されていた。

本研究の焦点となる「心身活性化」を目指すアクティビティ・サービスは、介護予防や自己実現につながるものであり、今後、重要な研究テーマとなることが予想される。本研究では、3ヵ年をかけて、より精緻な介護予防サービスの評価基準を構築しながら、利用者の心身活性化に寄与するサービスのあり方に関して実証的な研究をすすめる。

初年度（平成15年7月～16年3月）は、介護予防のデイサービスの存在意義とそこにおける各種プログラムの効果、あるいはそれ以外の要素を含めた全体関連性等を明らかにすることを目的とする。

次年度は、個々の利用者の生活アセスメントを基に心身活性化のプロセスを追いかけて、サービスの効果を検証する。

最終年度は、過去2ヵ年の研究成果を踏まえ、住民によるミニデイサービスの専門性と介護予防効果を向上させるため、どのようなアクティビティ・プログラムが望ましいのか、どのようなアセスメント項目で利用者の変化をとらえるべきなのか、等に関するマニュアルを作成することを目標にする。下記のように、3ヵ年の研究テーマを設定する。

初年度のテーマ：アクティビティ・サービスの評価基準に照らしたサービス評価

次年度のテーマ：アクティビティ・サービスの介護予防効果を高める、生活アセスメントに基づく支援計画とその実施、そして評価

最終年度のテーマ：介護予防に関するアクティビティ・サービス・マニュアルづくり

1. 研究の位置づけ

(1)『板橋・ふれあい21』の介護予防事業の目的

1)『板橋・ふれあい21』は、介護の社会化・介護予防対象の虚弱高齢者及び一人暮らし高齢者の「老い」を課題に、彼らの自立と生きがいを目指す生活の質の確保及びその家族の身体的・精神的な負担の軽減を図る「介護予防システム」の一翼を担ってきた。

まず、「いきいき教室」に準じたデイサービスをスタートさせ、「制度で対応できない“狭間”を埋める」受け皿の創出を図った。

2) 自立生活共生支援・実習プログラムの開発

平成12年度からは、「生きがい対応型デイサービス事業」に準じた「自立生活共生支援実習センター」事業を開始し、高齢者の心身の活性化と「生きがい・やりがい・居場所づくり」による生活の活性化を目指している。

(2) 従来の研究の歩み

『板橋・ふれあい21』の発祥の地、前野地域には、板橋区立おとしより保健福祉センター、区立特別養護老人ホーム、区立前野いこいの家などが設置され、板橋区の高齢者福祉の象徴的拠点となっている。また、板橋区前野町に本部を置く大乘淑徳学園があり、これらの立地条件を背景に、関係機関の理解と支援・連携の下、「デイサービス実践と臨床研究」を課題とした活動を行うことができ、平成10年10月、報告書「少子高齢社会に備えて～ゆるやかな連帯と協働へ～」をまとめることができた。これは、介護保険制度の導入年度に自立判定の水際の虚弱高齢者に対する「生きがい対応型デイサービス事業」の政策導入に寄与した先行実践であった。

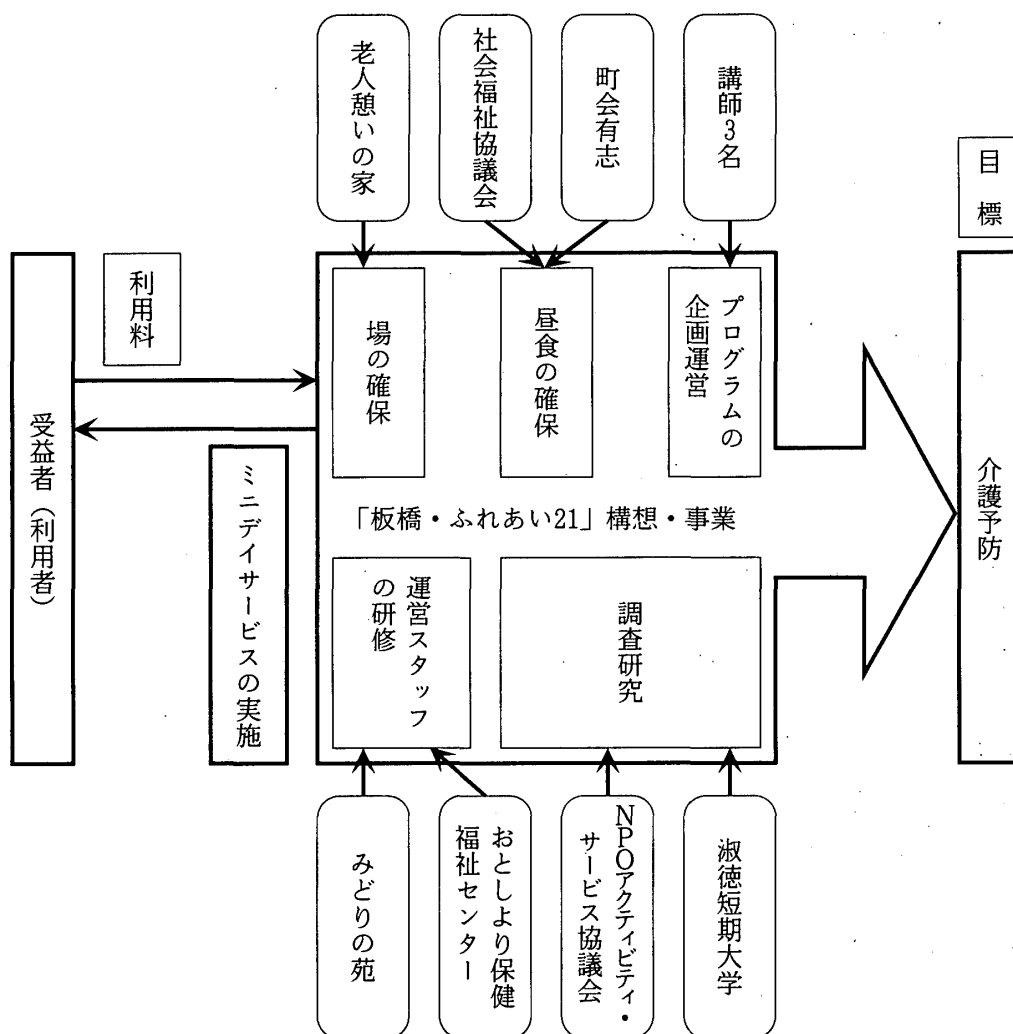
平成12年度から始めた「自立生活共生支援実習センター」は、虚弱高齢者の自立生活の支援・援助のあり方、地域の介護予防対策の基盤整備の強化・拡大、地域に生活する家族の社会参加（仕事に従事するキャリア・パートや地域活動）と家庭（子育て・介護）の両立を図る支援・援助のあり方、システムのあり方など、要介護者（虚弱高齢者）と家庭・家族（介護者）の生活・くらしの研究を課題とする。

(3) 今回の研究の意義

- 1) 『板橋・ふれあい21』は、持続可能な少子高齢化社会に備えて、地域コミュニティの「ゆるやかな連帯と協働」を主眼とする今日的課題である「安心して暮らせる地域コミュニティづくり」を提唱している。特に、誰しも避けて通れない「老い」に関する共有課題の解決のためには、総合的保健福祉施策である「介護予防のあり方」を模索する活動を行っている。
- 2) 『板橋・ふれあい21』は、“寝たきりゼロ作戦”地域版とでも言うべき「地域で支えるふれあいサロン」の共助システム推進計画、福祉経済立地の地域振興策、「仕事と家庭の両立支援」に向けて「受け皿」となる規制緩和による民間参入、NPO法人推進支援システム強化等のいくつかの背景をふまえて、高齢者を支える諸福祉サービスの乱立を憂慮し、それらサービスの質的低下を防ぐための「アクティビティ・プログラム内容の質的向上」を研究課題とした。
- 3) 具体的には、生きがい対応型デイサービス事業に準ずるデイサービスを行ない、アクティビティ・プログラムの内容研究と「生活の質の向上」を図る現場実践を行なう。

4) 平成15年度「地域ミニデイサービス事業・委託要件プロポーザル方式」の参加依頼を機会に、「共同研究」を淑徳短大塩野研究室と連携協働して行なうことになった。

専門分野の研究者と「板橋・ふれあい21」構想・事業の先行実践の共同研究は、「介護予防のあり方」に取り組む企画案として、下図に示す枠組の下実施されることになった。



2. 研究の骨子

(1) 概念の定義

1) 介護予防

「高齢者ができるかぎり寝たきり等の要介護状態に陥らないようにしたり、要介護状態になった場合でも、少しでも状態を改善できるようにすること」(『介護福祉用語辞典』)

2) 介護予防・生活支援事業、及び老人保健サービス

介護保険以外のサービスとして、介護予防や生活支援を行なうために、2000年度から実施されている国庫補助事業。市町村が実施したメニューに対して国が補助する。

①生活支援事業（配食、外出支援、寝具乾燥、緊急通報サービスなど）

②介護予防事業（転倒予防・痴呆予防・閉じこもり防止などの事業、食生活・生活習慣改善事業、生きがい活動支援通所事業、援助困難者の生活管理指導、実態把握・介護予防プラン作成など）

また、関連サービスとしてある「老人保健サービス」を概念枠組みの中に組み入れる必要がある。

③老人保健サービス（健康教育、健康相談、健康診査、機能訓練、訪問指導）

3) アクティビティ・サービス

「アクティビティとは、歌の会やラジオ体操等の日常のレクリエーション、自発的な勉強会や趣味の会、誕生会や花見等の行事、生活リハビリテーション、朝晩のお祈り等の宗教活動、など日常生活を活性させる全てのサービスを含む」（厚生省『高齢者ケアプラン策定指針』より）

・アクティビティ・プログラム：こころを動かす（活性化）ためには個人のニーズに合ったものでなければ何の意味もないが、それぞれのこころを動かすために具体的に計画され、準備されたものがアクティビティ・プログラムと呼ばれる。¹⁾

4) 介護予防アセスメント項目

全国在宅介護支援センター協議会は、独自に実態把握と介護予防プラン作成をすすめる事業を実施してきた。その事業を実施するために開発された、実態把握から介護予防プラン作成までの一連の手法と様式がある。介護予防アセスメント項目は、それに包含されているものである。²⁾

（項目一覧）

- ・基本項目
- ・家族状況
- ・生活状況
- ・健康管理状況
- ・社会的活動状況
- ・住環境
- ・特記事項

（2）研究の目的

1) 虚弱高齢者の介護予防を目的としたデイサービスの高齢者自立支援のプログラム内容を考える。

2) 虚弱高齢者の心身の活性化・生活の活性化をめざす実践の高度化

3) 「介護の質の向上」

(3) 研究方法

1) 事例研究法

少数事例を詳細に調べることによって、介護予防のデイサービスの存在意義とそこにおける各種プログラムの効果、あるいはそれ以外の要素を含めた全体関連性等を明らかにすることを目的とする。

〔資料収集の内容〕

①個人的な情報（初期情報、経過情報）

⇒被調査者に関するアセスメント票に基づくモニタリング

②デイサービスにおいて実施されているプログラムに関する記録

イ、スタッフによる記録

ロ、学生の参与観察による記録……毎週土曜日のデイサービス事業への参加……現地調査法としては、学生調査員が参与観察※を行なう。

※参与観察法……「観察者が被観察者の属する社会や集団に入り、同じ社会生活を体験しつつ、内側から観察する社会調査法のひとつ。」（『現代社会福祉事典』より）

③利用者によるアクティビティ・プログラムに対する評価「アクティビティ・ワーク」による外部評価

⇒被調査者の自宅訪問によるインタビュー調査

2) 客観的な情報収集

参与観察は、被調査者の生活に密着しすぎ客観性を失うおそれがあるので、客観的な指標を準備する。

初年度⇒『アクティビティ・サービス評価基準（仮説）』

次年度⇒『利用者実態把握票』、『生活アセスメント票』

最終年度⇒過去2ヵ年で用いた指標を改良して用いる

3) 研究期間

平成15年度から平成17年度までの3ヵ年計画

本報告は、初年度（平成15年度）報告

4) 共同研究体制

①研究主体

イ、『板橋・ふれあい21』

ロ、淑徳短期大学塩野研究室

ハ、特定非営利活動法人アクティビティ・サービス協議会

②アクティビティ・プログラムの企画・運営

『板橋・ふれあい21』担当講師……有資格者3名を招聘

荒畑純子・植木加寿子・浅川幸子

③協力参加

『板橋・ふれあい・21』スタッフ、塩野研究室の学生数名

3. 荒畑講師の計画と実践

(1) 計画の概要

1) 回数

前期・6回(4月～9月) ☆後期・7回(10月～3月)

2) デイサービス・プログラム内容の企画の特色

「シリーズ方式」

〈ねらい〉初老の健常者であれば、3時間あればできるが、3日間にした理由

⇒一つの創作・作品を時間や日をおいて系統的に、継続させて“まとめ・完成”させる初日の不安と「期待感」、中日に「やる気」、完成した「満足感」、地域交流・さくらまつの「展示」で、達成感を味合う。

①4月から3ヶ月間の月・1回アートフラワー(アガパンサス)

②8月から11月迄の月・1回のアートフラワー(リース・ばら)

③1月から地域交流・さくらまつり(4月第1日曜日)の展示発表にむけての隔週ぐらいの間隔で利用者全員参加による「共同制作」が組込まれている。

「共同企画方式」

荒畑講師と植木講師の企画「共同制作」

☆手芸に「書」を取組む手法を取り入れたパッチワークの壁掛け

植木講師の担当⇒季節感のある草花の字を、一人一枚、墨で書く

和風の無地布にアルカリ絵の具で転写する。

荒畑講師の担当⇒その生地、花の図案をあしらひ、それぞれ刺し子を刺す。刺し子の作業が終わった方は、柄布を带状にパッチワークの作業に入る。最後に、全てを繋ぎ合わせ、タペストリーの完成。

(2) 実施内容

〈実施日〉 〈プログラム内容〉

4月26日 和紙染めランチョマット

参加者・13名 〈準備〉 和紙、染料

荒畑講師 午後・ゆるやかな体操・風船バレー

[留意点と観察結果]

- ・日々の食生活で使うランチョマットの色彩、「色」選び・創作作品の出来栄で好みを知る
- ・プログラムは、その日の利用者・虚弱高齢者の体調や当日の天候・気候など、充分考慮した上で進めていくことが大切。無理をしない。

5月24日 アート・フラワー

参加者・13名 アガパンサス ①

荒畑講師

〈準備〉生地、染料

午後・ストレッチ体操、頭の体操（文字集め）

- ・関心を持ち“やる気を起す”工夫
- ・月に1回・3回コース・第1日目
- ・達成感と興味の持続・飽きさせない努力
- ・気候もよいこともあり、気分よく楽しむ
- ・食中毒に気をつける季節

〈アート・フラワー第1日の留意点〉

「生地を型通りカットし、好きな色に染める」

イ、3年前に比べ視力が低下し、細かい作業が無理になってきた利用者のプライドを傷つけないように、全員の材料分を一人分に切り分ける。

ロ、大まかな作業をお願いし、花びらのカットはいつも何くれなく世話をしてくれる隣の利用者にお手伝い頂くようお願いする。

☆色の選択には、五色の色合いを用意する。実際にある花の色（2色）とアートな色

☆利用者一人ひとりの持ち味を活かした出来あがり想像、期待しながら、好みの色に染めるよう働きかけ、利用者の個性を発揮する機会とする。

- ・芸術センスの高い人、
- ・“ものづくり”に関しては他の人の意見に左右されない人、
- ・“こだわり”の発言に、皆さんを魅了させる人も満足し楽しめる
- ・普段、他の人の意見に左右されやすい利用者の人達には、自分の好みを選べるよう声かけをする。

☆健常者であれば、30分あればできる作業だが、1時間をかけてゆっくり考える時間を取りながら作業を進める。

6月28日 アート・フラワー

参加者・14名 アガパンサス ②

荒畑講師 パーツ作成 〈準備〉 芯、ワイヤー

午後：体と頭の体操

- ・前月の続き、色の選び方などで違いの発見
- ・自信をもち手馴れた中に、油断を発見
- ・参加者相互の作品比べ「来月には…！」
- ・作品づくりの達成感・満足感を得られたよう
- ・梅雨時の鬱陶しい気候だが、体調良好楽しく過ごす。

〈アートフラワー第2日目の留意点〉

「花芯制作（同じものを一人15本）」

新しいものを作るといふことの作業に関し、理解力や視力が低下していると思われ

る人たちには、他の利用者の作業進行に合わせ、スタッフが援助する。

☆単純作業であるため、飽きさせない、疲れさせない配慮と工夫に、最近の誰にも見聞きしている話題性のあるニュースや昔話、旧き善き時代の事柄を問うなど、手を休めるキッカケづくりの話し掛けを随所に入れながら進める。

7月26日 アート・フラワー

参加者・13名 アガパンサス ③

荒畑講師 〈準備〉 パーツ作製

午後：ブーケ仕上げと鑑賞

- ・「頑張りました。」(パーツ完成、相互の評価から)
- ・出来あがりの達成感と自分でもできる自信を持つことができた喜びが感じられる。
- ・最初の取組みの不安と完成後「やればできる」

〈アートフラワー第3日目の留意点〉

「花を仕上げ、チュールレースとアレンジする(完成)鑑賞会」

☆相互評価⇒それぞれのよい部分の発見

事例：染色がよかった。・仕上げがきれい。・組み方が芸術的。・染むらが失敗でなく、かえていい雰囲気を出している。：必ず、よいところを認め誉める。

☆鑑賞会⇒完成した満足感、達成感を味わうため、全員の作品をホワイトボードに展示し、「鑑賞会」を行なう。

☆自分の作品とは違う、他の人の作品の良いところの発見の学びが、次回への意欲につながる。

〈アガパンサス〉7～8月に、白・青・紫などの散形の優しい色の花を咲かせる。南アフリカ原産のユリ科の植物。花が咲く頃に作品が仕上ることを考慮し、また、花名にはあまり馴染みがないが、ここ2～3年、前野町近辺でも育てる方が増えよく見かけるようになったこともあり、地域の高齢者・利用者の皆さんが散歩の際などに、興味を持つ機会づくりの一つとして教材の素材に取り組む。

身近に感じ、外に目を向け実際に咲いているアガパンサスに出会ったときを想像すると、身近な生活の活性化を課題に題材企画を選択する励みになり喜びになる。

〈準備内容〉既製品の「染め済みの花びら」の用意をすれば、スタッフとしては楽なのだが、このデイの研究課題の目的は、虚弱高齢の利用者のペースにあわせ十分な時間を取り、ゆっくりと作業を進めることにより、“意欲”や“興味”を引きだし深めることである。つまり次回への楽しみを持つあるいは、完成したときの達成感を味わうことを狙いとして、手作りにこだわった。

また、手作業により脳の活性化を図ることを意図しており、準備は大変ではあるが利用者一人ひとりが、なるべくできるところから、できる部分を多く取り入れる事を前提に、白い生地に「型」をスタッフが書きこんだものを事前に用意する。

〈留意点〉1日のデイサービスで仲間と1週間ぶりに出会うデイを楽しみに体調を整

えながら自力通所をしている。そうした虚弱高齢者を対象するだけに、プログラムの内容の吟味・進行方法の工夫が必要であり、予定通り進まない時は、無理をしないことを原則とする。

8月23日 アートフラワー「ばら」①

参加者・13名 〈準備〉アートフラワー染め・生地

荒畑講師 午後：久々の「体をほぐし」、「頭の体操」

- ・2週間ぶり（夏休み）の再開に楽しく「おしゃべり」する様子は、細かい動作の変化の度に、「ことば」「声」に現れ、「声をかけあう」

9月27日 アートフラワー ②（リース）

参加者・13名 〈準備〉ワイヤー、生地

荒畑講師 午後：体操と点取りゲーム

- ・新しく参加した方の2日目に注目。楽しそうで、打ち解けた様子が見えているが、神経を大部使っているので、スタッフ・フォローが必要である。

10月25日 アートフラワー ③（リース）

参加者・13名 〈準備〉ワイヤー、生地

荒畑講師 午後：体操・漢字集めゲーム、記憶力ゲーム

- ・「何かを作る」ことを目的とするのでは“ない”ことを理解させる努力
- ・「手芸や手作業の過程の大切さ」を話題のなかに含ませ、和やかに心身の活性化、生活に弾みをつけるアクティビティ・ケアを考える

11月8日 アートフラワー ④（リース）

参加者・13名 〈準備〉「バラ」アートフラワー

荒畑講師 午後：トランプゲーム

- ・4ヶ月かかりやっと仕上がったバラを、やっと持ち帰ることができ、満足感が見える。

☆アートフラワーの4日間

作成後の達成感は、月1回、4ヶ月の時間・空間の中での作業だっただけにその感を強くした。利用者の知力・体力に対応したプログラム内容は、この期間のなかで、「なぜ、このようなプログラムを必要としたか、組込んでいるか」を、常に、意識し課題として「自らのライフサイクルをより豊かな心身の弾み・弾力化を求めて、“やりがい”を獲得する挑戦力を自信につなげる」工夫が必要と考える。作業過程の道具を使う意図、色彩感覚を取り戻す作製意図に加えて、利用者の感情に敏感に応える「感嘆詞・言葉の表現」の工夫など、ふれあう一挙手一投足に細心の配慮が求められる。

☆9月～11月・アートフラワー準備内容「薔薇のリース」

作業・度合い⇒前期のアガパンサスが細かい作業だったため、後期にかけて「手作業」としては楽な大輪の薔薇を一輪組み、クリスマスのリースに仕上げる。

四季の季節⇒クリスマスリースを飾りだす11月後半に仕上げるよう「3回」に分け、ゆっくりと時間をかけることを心がけ進める。

色合の選択⇒アガパンサスが春夏の素材の色に対して、今回は秋薔薇をそれぞれのイメージに表現することを目標に、厚手の生地、秋色5色を準備する。

〈留意点〉アートフラワーの題材は、常に季節感を考慮に入れる。

また、本物が身近なところで見ることができる。その花を見たときに発見するアートとの違いや共通点等を感じることができるような情報提供の機会と考え、印象に残る仕掛けが作業を通して必要と思う。

〈事例〉葉の形態、花びらの色に関すること、近場で何処に咲いているかなどのお話を随所に取り入れながら進める。

12月27日 忘年茶話会・カレンダー作成

参加者・13名 〈準備〉水引き、和紙、画用紙

荒畑講師 午後：ゲーム「新聞紙ちぎり」、「文字集めゲーム」

・お茶の時間の話

・私の「“ふれあい”が終わった時が、終わる時」と冗談交じりの利用者の話に「ふれあい21」の重要性を改めて感じる。

〈年末最後のデイの日〉

お茶を飲みながら、全員が参加できるよう配慮し、1年間の思い出や年末年始の行事、「共同制作に関する」希望などを話し合い、年末最後のデイサービスの時間を共有する。

1月24日 さくらまつりに向けて

参加者・13名 〈準備〉パッチワークの花瓶敷

荒畑講師 午後：ストレッチ体操

・新規入会の方達（2名）が馴染むためのスタッフの「観察の眼」、スタッフの「声かけ」が求められる

・利用者の性格にも起因するが、声をかけられれば、応えられる能力を大切にしたい。

2月7日 さくらまつりに向けて

参加者・13名 〈準備〉折り紙、千代紙

荒畑講師 午後・カレンダー作成

・新しい利用者の傾向を把握

- ・浮いてしまうのを阻止する努力
- ・スタッフの「声」かけの必要性

3月6日 さくらまつりに向けて

参加者・13名 〈準備〉花瓶敷
荒畑講師 午後：誕生日会

- ・来年度の方向性・利用料等の不安
- ・利用者が心配・憶測などの声など、いろいろ話が持ち上がる。

〈誕生日会〉 年間のなかで利用者の方々の誕生月に行なう。

年間担当者の企画に準ずる運営を順守して行なう。

☆誕生日カードの作成を活用し、当該月の利用者を主役に、小さい頃の思い出話や新婚時代の話などを引き出し、心行くまで話をしてもらう。

独自の工夫はしないが、スタッフが変われば雰囲気も変わり、利用者とのふれあう感覚も異なると思われるが、一人ひとりの思いを汲み取りながらの“ひととき”を大切に思う気持ちは同じである。

3月27日 さくらまつりに向けて

参加者・13名 〈準備〉パッチワーク
荒畑講師 午後：パッチワーク

- ・刷新元年、「助成制度」の廃止など
- ・利用者負担について「多少利用料が値上がりしても、ここに来るのが楽しく生きがいだから」の声を聴く

〈「さくらまつり」に向けた「内容と準備」について〉

- ①個性ある一人ひとりの習字の力量に相応させ草花の名前を選ぶ。
- ②個々の字の出来具合、手芸能力などを勘案して刺し子の図案を考える。
- ③この作業の個々人の無理なところは、プライドを傷つけないように配慮し、前もってパッチワークの生地を切る作業や直線を縫う作業などを自然体でお願いするように準備する。

〈評価〉高齢者の場合「何が起こるかわからない」

予定は、あくまでも予定であり完成は次年度に持ちこむことになる。

=理由= 想定していなかった事態が起こる

1. 利用者の中に、[共同制作] の中心になって仕上げるの力量を持つ方が、病気の為通所不可能となる。
 2. [共同制作] の集中時期に、個々の事情で長期欠席者・2名
 3. 高齢化により手芸能力が低下しだした利用者
 4. 新しく参加の利用者の方々が、慣れるまで時間が必要、等
- ☆企画・計画予定と代案の準備の必要性

利用参加者の動態を優先するプログラムメニューが必要と常々考えており、多くのプログラムメニューの研究・開発と不断の努力はかせないことを立証された思い。

(3) 実践内容に関する自己評価

〈利用者のアセスメントと企画上の配慮〉

体力的に衰えが見える利用者も、ゆるやかに、あせらずに、マイペースで作品に組んでいる。

☆飽きを見せるほど長時間の作業としていないことを重視し、簡単な興味を持たせる作業展開の工夫と、気持ち・気分転換を試みる。

☆創作物の完成を主眼とせず、持続させる時間は考えない方が良く考える。

☆一人ひとりの取組む姿勢に声かけを担当者自身の自然体で行なう。

☆1日のデイサービス運営の中で、どのように活用できるか、

・時間配分には、利用者のその日の一人ひとりの体調・気分を推し量りながら運営することを心がける。(不断の緊張感と学びの経験を積む)

・「声」を聴き・意を汲み取り・聴きわけ、プログラム内容に結びつける努力が実り、虚弱高齢者の態度・姿勢に参加意欲があらわれる楽しみが伝わり、雰囲気が高揚の相乗効果と低下気分の影響は無視できない事実。一喜一憂の緊張感。

4. 植木講師の計画と実践

(1) 計画の概要

1) 回数

前期・6回(5月～9月) ☆後期・7回(10月～3月)

2) デイサービス・プログラム内容の企画の特色

デイサービス・プログラム内容の企画の特色は、身近な生活に安らぎと潤いを求め、四季折々の季節感を留意しながら、「書」に“ふれる”

☆1月から地域交流・さくらまつり(4月第1日曜日)の展示発表に「書」を素材中心に展開している。

☆一喜一憂の心境：常に、新鮮で心の安らぎが求められているを知る

(2) 実施内容

〈実施日〉 〈プログラム内容〉

5月17日 花のタペストリーに「文字」を

参加者・13名 春から初夏の季節を感じながら、和紙を“ちぎる”⇒指先を使う。

植木講師 〈準備〉 絵の具を使用

⇒色を楽しむ・選ぶ

半紙以外の素材

⇒文字を書く

[留意点と観察結果]

- ・関心を持ち“やる気を起す”工夫
- ・文字を表現して、作品として仕上げる
- ・文字を書く⇒自分では決められない
- ・見本と同じ、皆と同じになる
- ・清書⇒普段の生活に無い緊張感
- ・飽きさせない努力

6月14日 “うちわ”づくり・紙染め

参加者・14名 利用者の希望・求めに応じて、製作する

植木講師 〈準備〉経験済みの紙染め

文字書きも、思い思いの字で、7月に仕上げとなる

- ・色の選び方などで違いの発見
- ・自信をもち手馴れた中に、油断を発見・参加者相互の作品比べ
- ・作品づくりの達成感・満足感を得る

7月5日 [七夕飾り] 短冊に書く

参加者・13名 四季を感じながら、ゆっくりと

植木講師 短冊に筆で願い事を書く

〈準備〉笹に飾り付け、楽しみながら思い思いの願いが叶う様に

- ・四季折々の年中行事、子ども時代
- ・子育て時代を思い出す
- ・利用者自ら子どもの時に折ったり、作ったりした七夕飾りを自由に楽しみながら制作した様

8月9日 筆置づくり：台風の為・中止

9月13日 秋の“ことば”をしつらいに

参加者・13名 「もみじ・しだ・つばき」の葉を使って

植木講師 〈準備〉葉に薄墨を塗り、それを和紙に押しつけ葉の形、葉脈を写す。絵の具で色をつけて自然に仕上げる。秋のことばを書くポストカード

- ・初めてのポスト・カード作業であったが、仕上りも大変良く、満足度と作業の面白さを満喫した様子

〈講師の“ねらい”〉

☆デイサービス・アクティビティの視点から、虚弱高齢者から初老の健常者まで、

過去の生活に「筆」を認める経験の有無に関係なく「書に親しむ筆さばき」を体験する。

☆作品に仕上がる過程の苦心が、楽しみと達成感を感じてもらえた実感が伝わる。

10月11日 筆置きづくり

参加者・13名 〈準備〉一人二つずつ

植木講師 陶器の筆置きを作る

- ・何人かの利用者が「いきいき教室」で陶芸の経験があり、自由な発想で製作する。
- ・初めての利用者は、なれない手つきではありながら、土いじりを楽しんでいる様子。焼きあがり楽しい。

11月22日 四季折々「正月飾り」 ①

参加者・13名 〈準備〉ダルマ・アクリル絵の具

植木講師 〈作業〉ダルマに絵の具で色を塗る

顔を書き・表情が入る・最後に文字を入れ・仕上げる。

- ・11月12月2ヶ月で正月飾りを仕上げる予定で、のんびりと楽しみながら、ダルマに色塗りを進めていく。
- ・顔の表情も豊かに書けた。

12月13日 四季折々「正月飾り」 ②

参加者・13名 “ダルマ” 仕上げ

植木講師 〈準備〉小筆、書道道具・和紙・のり

午前・午後・引き続く

- ・作業に難しい部分は、担当者が手を添え・手伝う。「無理しない」負担にならないように進める。
- ・初めての経験に充実感を持つ努力

〈講師自己評価〉

- ・今年最後の担当の日として「毎年のお正月の過ごし方を問う」
利用者の方々の共通話題だったが、関心を持ちながら聴くには努力が要る。
特に、声の小さい人が話す時に、他の方の私語が目障りで、聞きづらい時の注意のし方が難しい。
また、注意しなければならないことは、難聴の方は聞き取りにくいので、一人ぼっちの状況に陥りやすく、自分が話す時は大きな声になる。
- ・[共同制作] について (関係資料・荒畑講師の項目参照)
制作企画趣旨・「花」をテーマに「書」と「手芸」の一つ一つをどのように“一つ”の作品にまとめられるかを課題に、制作意図のカリキュラム「書の文字と花の名」を選択する過程の手順を考える

1月10日 四季折々「書初め」

参加者・13名 〈準備〉10種類の筆

植木講師 大筆・中筆・小筆・太さ

「筆」知る⇒羊毛・狼・馬・狸・いたち等の種類の筆に「触れる」

説明で「知る」

「書初め」書けた喜びひとしお

- ・四季折々をテーマに「書」の善さを見なおす・発見の機会
- ・大筆を握りながらの挑戦
- ・いつもより大きい“筆”と“紙”で

2月14日 さくらまつり・準備 ①

参加者・13名 おひな様作り・簡単な体操

植木講師 〈準備〉石・和紙・水引き・ビーズ

午後：おひな様作り・仕上げ

- ・地域交流・参加の機会「展示」目標に作品を創る
- ・幾つになっても、女性とおひな様は思い出の一つ
- ・手作業をこなしながら、話も弾む。

2月28日 さくらまつり・準備 ②

参加者・13名 〈準備〉手芸道具・刺し子

植木講師 午前・午後：引き続き・仕上る、簡単な体操

- ・さくらまつりの展示・発表に向けて手芸や書道などの一つの励みが弾みになる。
- ・年度当初を目標に、展示を意識する年間の活動プログラム目標とする。

3月13日 さくらまつり・準備 ③

参加者・13名 「文字書き」作品創り

植木講師 自然に「筆」になれて

スムーズに筆運びもできた

- ・「書道に親しむ」を課題に、親しみ楽しみながら、“筆”を使って文字を書くことを試みてきた。・普段余り感じない緊張感も味わい、なれる、出来た喜び

5. 浅川講師の計画と実践

(1) 計画の概要

1) 回数

前期・6回(4月～9月) ☆後期・5回(10月～3月)

2) デイサービス・プログラム内容の企画の特色

☆デイサービス・プログラム内容の企画の特色は、身近な生活から健康管理に筋肉・筋力の低下を防ぎ、維持・補強に心がけ、生活のなかの安らぎと潤いを求める癒しの文化、四季折々の季節感、自己管理を意識的に心がけるよう健康管理を意識づける話しかけ、声かけによるインプット。

☆印象に残るよう工夫。

☆一人ひとりが日常習慣づけている・心がけていることを聞き出し、その善さを「試してみよう」「なぜ善いか」利用者の声を展開していく。

☆2日間の外食意図は、自力通所で「やっと辿り付いた面持ちで入室する虚弱高齢者」も混合する利用者の実態は、余り外に出たがらない気風があり、季節柄の程よい気候に便乗し気分転換も含む思いで散策を主題に企画した。が、当日の天候で「ゆるやかに、急がない、マイペースで行動する」

☆一喜一憂の心境を利用者の気持ちを「いち早く察知する」努力で克服する。

(2) 実施内容

〈実施日〉 〈プログラム内容〉

4月19日 心も体も健やかにリズムって

参加者・13名 “楽しい?” “カラオケは?”

浅川講師 〈準備〉カセットテープ・色紙・写真

音楽に合わせて体操:

午後:誕生日会

・利用者の声を傾聴し、意に添う努力を重ねる。

・「声」を出すことに関心を持ち楽しみながら唄う。

5月10日 知ってるつもり“童謡”

参加者・13名 〈準備〉カセットテープ・色紙・写真

浅川講師 午前:童謡を聞き、音楽に合わせて

体でリズム・体操へ

午後:身体を動かす・踊りの練習

・子ども時代・子育て時代を思い出す。今も昔も変わらない“童謡”

・「カラオケもたまにはいい」と要望される。・音楽やリズムに合わせて身体を動かす運動を健康法の一つ

6月21日 童心にかえって

参加者・13名 〈準備〉輪投げ・色紙・写真

浅川講師 午前:体操と輪投げゲーム

午後:誕生会「唄とおはなし」

・久々の体力維持・身体を動かす

- ・達成感と興味の持続
- ・飽きさせない努力
- ・関心を持ち“やる気を起す”工夫

7月19日 “自分”を楽しむ

参加者・14名 遊びについていこう

浅川講師 〈準備〉ゲートボール用ステック

- ・与えられた楽しさを自分のものに
- ・遊びにのれない人に働きかけている
- ・参加者相互の個性「来月には…！」と期待し・満足感を得るための工夫

8月30日 夏負けしない体力・健康体操

参加者・13名 〈準備〉ゲーム・お手玉・色紙・写真

浅川講師 午後：誕生日会・「唄」を唄う

運動しやすい服装

- ・手足の筋肉補強・維持に努める。普段使わない筋肉をお手玉を使う
- ・「声」を出す練習“お腹から”
- ・健康管理（体力の低下を防ぐ維持管理）
- ・自己の健康保持に関心を持たせる工夫

9月20日 “きりえ”に挑戦

参加者・13名 田圃と案山子

浅川講師 〈準備〉色画用紙

- ・器用・不器用の差は無関係
- ・指先を使う作業と画面の配置に気を使う。でき映えにホッとする。

〈講師の“ねらい”〉

☆デイサービス・アクティビティ「誕生会」

（プレゼントに色紙に写真を貼った手作りの記念品）

- ・虚弱高齢者から初老の健常者まで、体力と気力による健康維持と、1日の過ごし方による楽しみの発見と、「やってみる」機会をつくる出番づくりと、お誕生会の雰囲気に合わせての人間関係づくりと、そして出会いを自ら求める積極性を発揮させることを狙いとする。

10月18日 団欒：「外出」を話題に

参加者・13名 散歩・歩き方の工夫を考えて

浅川講師 〈準備〉予め献立から選択注文

午後：トランプゲームと感想を

- ・初めての試み昼食を和食専門店へ
- ・みんなで外出、公園脇を散策し、ゆっくりと目的のお店への往復
- ・いつもと違う感想「味の講評」
- ・新しい町の風景にふれる発見

11月15日 来年度に向けて「刷新元年」

参加者・13名 コーディネーターの話

浅川講師 先週と同様に外出を意図に外食

- ・厳しい現実と高齢者の暮らしの話に
- ・これから、「21」はどうなるの不安
- ・自分の求めるライフサイクルを探る

12月20日 クリスマス「リースづくり」

参加者・13名 〈準備〉色画用紙、リボン、モール

浅川講師 午後：クリスマス会、ビンゴゲームなど

- ・週の1日を楽しみにしている利用者の方達は、寒さに負けない気力で、自力通所の迫力
- ・「今日1日」の思いが、ゲームを楽しむ姿に滲む。
- ☆クリスマスを目前に童心に帰った利用者の手作りケーキは、作る機会が少なくなった利用者と「手づくりの楽しさ」「おいしさ」を新たに見つける。
- ☆出来あがった満足感を味わう。

1月17日 「カレンダー飾りづくり」

参加者・10名 〈準備〉カレンダーと飾り材料

浅川講師 午後：絵合わせゲーム

- ・1年の計“ひととき”を語りながら
- ・四季折々の季節感を鰯合う先取り
- ・若い頃の日本の価値を語る昔話

2月21日 自分で工夫・背筋を伸ばす

参加者・13名 〈準備〉刺し子・歌詞集

浅川講師 午前：体操と刺し子の仕上げ

午後：誕生日会

- ・心身をいきいきさせる気晴らし、楽しみを持続させる為に、自己の背筋を意図的に伸ばす心地よさを 自分で発見する「自己管理のすすめ」
- ・歩く時の工夫 ☆座る時の工夫

6. アクティビティ・プログラム実施上の枠組み

(1) 実施場所と実施日

- ・地域の高齢者利用施設「前野いこいの家・洋室・厨房」

“生きがい対応型デイサービス”に準ずるデイサービス事業として、区から無償貸与

- ・毎週土曜日 午前9時～午後3時半

(2) デイサービス・アクティビティ・プログラム内容・種別

- ①座って行なう趣味活動（パッチワーク・刺し子・ちぎり絵・はり絵・書道）
- ②体を動かす趣味活動（リズム遊び・ゲーム遊び・ゆるやかに背筋を伸ばす）
- ③音楽活動（観賞・タンバリンなど楽器を使って）
- ④茶話会（高齢者の時代の背景・苦労話など・生育暦を語る）
- ⑤誕生会（該当者の誕生を祝って）
- ⑥学習活動（栄養・健康の話、講話）
- ⑦話し合い（ミニデイサービスの今後のことなど）
- ⑧出かけるもの（散歩、外食）
- ⑨配食・配膳・跡片付け（できる役割を担い合う）

(3) プログラム計画上の目標

- 1) 高齢者の地域社会参加の推進を図る

出会いと居場所：地域交流・前野さくらまつり「発表の機会」

- 2) プログラム内容を高齢者の介護予防の一環と位置付ける

心身（知力・筋力・体力）の保持維持、自らできることに参加・挑戦へのキッカケづくりを意図する。

7. プログラム実施過程の評価

(1) 運営上の評価

- 1) 連続講座について

次回への期待感を高める、完成させる喜びが得られるなど、シリーズ化する意義を認め、月一回で3～4カ月の連続講座を企画した。

荒畑講師は、意図的に「シリーズ方式」を採用している。5/24、6/24、7/26と3回連続で、アガパンサスのアートフラワーづくり、8/23、9/27、10/25、11/8と4回連続で、ばらのリースづくりを行った。

- 2) 席の固定化・席替えについて

席が替わることによってコミュニケーションが促進されることがある。プログラムによって、いつもの席を替える配慮も必要である。

3) 副次集団について

以前から仲の良い人同士がグループになっているので、担当者は新人を融合させる配慮が必要である。ただ仲間意識が強くなるということは通所の意欲につながるなどの良い面があるため、仲の良い人同士の副次集団（サブグループ）を解体させることなく、新人を受け入れるようにするべきである。グループワークの手法を活用する必要がある。

4) 細かい作業が要求されるプログラムにおいて

視力の衰えに配慮しないと、利用者を疲れさせることになる。手を休めるショート・プログラムを用意すると良い。

5) レクリエーション財の選択について

アートフラワーや書道などの種目は、レクリエーション財と呼ばれ、「財」に含まれる諸要素は適切な用い方によって利用者にとって意義あるものとなる。

『板橋・ふれあい21』では、各担当講師が自分の専門（得意）分野によってプログラムを選択する。数人の講師が週代わりで担当するので、一つのレクリエーション財は月に一度の割合となる。担当者は、得意分野であるため十分な準備を行うことができる。

次項において、個々のレクリエーション財の用い方に関する評価を行う。

6) タスク・ゴールよりもプロセス・ゴールを重視することについて

ゆっくりとしたペースで作業を進めることにより、利用者の疲労感を防ぎ、また、利用者間のコミュニケーションを促進することになる。毎回のプログラムに伴う作業は、何かを作ることが目的というより、それが心身の活性化作用があるとか、仲間関係づくりに役立つことこそが目的なのだとすることを踏まえて進めていくことが大切である。

7) 利用者の主体性の尊重について

いつもは全員がひとつのレクリエーション財に取り組むので、主体的に選択する余地はない。但し、作業上、個人の創作の余地を多く残しているため、個性が発揮される。

11月1日は、午後のプログラムにおいて、「ゲーム」、「折り鶴の続き」、「パッチワークの続き」の3種を各自が選択するという異例の内容であったが、利用者の反応は良好であった。

21

(2) 個々のレクリエーション財の評価

1) パッチワーク

(良い点)

- ・熱中して仕上げる過程は、右脳刺激による前頭葉の活性化を促し、介護予防につ

ながる。

- ・一つの作品を完成させる喜びは、生きがいをもたらす。
- ・作業の過程で利用者同士の助け合いが散見されるが、これは、仲間関係が醸成される過程である。

(考慮すべき点)

- ・視力が弱い利用者にとって、パッチワークの柄が見えにくいことがあった。判別しやすい柄を用意する必要がある。
- ・他のプログラムに比して利用者の疲労感が高いようなので、今回（手提げ袋）より大きなものを作るようにするべきではないか。

2) アートフラワー

(良い点)

- ・花びらの色を自分で決める作業は、個性を発揮する楽しさをもたらした。
- ・染め上げの面白みによって、利用者の情緒は喚起された。
- ・思い通りの作品ができた人が多く、いつもよりうれしそうな顔が並んだ。
- ・視力の弱い人に対するさりげない手助けを隣席の人に頼んでおいたのは良かった。
- ・花の選定に当たって、季節の花であること、地域に日常的に見られる花であることを考慮したことにより、利用者の日常生活の活性化をもたらす可能性が高まった。
- ・アートフラワー作りの工程を分割し、毎月一回の連続作業とし、次回への意欲を引き出し、また、最後の達成感を発表会によって得られる工夫があった。
- ・悪戦苦闘している人もいるが、ほぼ全員が楽しそうであった。

(考慮すべき点)

- ・作業の早い人・遅い人、黙々とやる人・おしゃべりをしながらの人、人それぞれのペースの中で、思い通りに進まずにいらしている人を見つけ、支援しなければならない。
- ・作業の時間が押してしまい、ゆっくり話しをしていたのに、中断させなければならなかった。夏休み明けで再会の喜びから会話が弾んでいたのも、作業より会話を重視すべきだったのではないか。

3) 頭と体の体操（ゲーム）

(良い点)

- ・ふだん見せない喜びの顔を見せていたので、情緒の喚起をもたらし心身を活性化させた。
- ・全員参加ゲームで協力し合う内容のときは、特に楽しそうである。
- ・体を動かす内容は、みな楽しめているようであり、身体的機能の活性化による快の向上に効果を認めることができる。

(考慮すべき点)

- ・いつも決まった人同士の会話になってしまったときは、互いにコミュニケーション

ンを取り合える内容にアレンジすべきである。

- ・中には、このプログラムを不得手としている人がおり、表情が暗かった。集団でやる場合の個別性の捨象が必然的に引き起こす問題であり、常に個別化の視点をもって対処すべきである。

4) 刺し子

(良い点)

- ・多くの人と一緒にしゃべりをしながらできる点が良い。
- ・各自で工夫したり、アイデアを出し合ったり、夢中になって休憩時間にも続けたり、みな裁縫が好きなようであり、細かい作業による目や手先の疲労を乗り越えて、取り組んでいた。
- ・完成品は、一人ひとり柄が違って、個性的であった。

(考慮すべき点)

- ・刺し子の絵柄は3色から選べたが、自分の好みのものを選べなかった人の不満があった。
- ・午前だけでなく、午後も「刺し子」だと、不得意の人にとって大変そうだった。
- ・終わっていない人には焦りもみられた。
- ・楽しげにやれている時は良いのだが、黙々とやり続ける時もあり、そうだと空気も重いし、目などの疲れも意識される。

5) 健康体操

(良い点)

- ・お手玉を使って、ふだん使わない筋肉を動かすことができる。
- ・ふだんの運動不足の解消
- ・ボッチャーという的当てゲームでは、自分の力加減でできるので、おもしろそうに取り組んでいた。

(考慮すべき点)

- ・メンバーの中には、ぎっくり腰がまだ痛かったり、足を痛めている人がいて、午前中通しのプログラムとしては、きつい内容だった。

6) 誕生会

(良い点)

- ・祝ってもらって、みな一様にうれしそうだった。
- ・自分の写真がプレゼントされ喜んでた。
- ・童謡などみなで歌えるものが良かった。
- ・回想を引き出し、多くを語らせたのが良かった。

7) 健康・栄養講話

(良い点)

- ・自分の意見を言うプログラムでもあり、積極的に発言できた人にとっては満足感の高いものだった。

- ・真剣に話を聞きメモを取る人もいて、教育的なプログラムとしては良かった。

(考慮すべき点)

- ・午前、午後と話し合いだけのプログラムなので、最後の方は疲れ気味だったり、集中力が切れかかっていた。午後は、軽体操とかゲームとかを取り入れて気分転換を図れば良かったのではないかな。
- ・「今日一日しか生きられなかったら、何をしますか」という質問を投げかけられ、死について考える部分もあった。利用者の反応として、「死なんて考えたくない」という声もあがったりしたが、このテーマ（死の準備教育的なもの）は重要なので、片手間の取り上げるより、宗教家を呼ぶなどわかり易く話しやすい状況を作り出すプログラム上の工夫が求められる。

8) 紙粘土による筆置きづくり

(良い点)

- ・何を作ろうか考えたり、自分の好きな形にしたり、出来上がった時の達成感が高くなった。
- ・手際よくできる人は他の利用者の面倒をみて、迷いながらも楽しんだり、それぞれのペースで作業が進行できた。

9) 書道

(良い点)

- ・みなが好きなプログラムである。集中できるし、楽しさもあるからである。
- ・書初めでは、一人ひとりの干支の絵を講師が書いてあげた後、各自が好きな字を書いた。そこで、めいめいの正月話に花が咲いた。

10) 散歩と外食

(良い点)

- ・「公園の葉っぱの色探し」というテーマをもたせた散歩だったが、公園の植物に興味を引かれるだけでなく、幼稚園の運動会を見たり変化に富んでおり、話題が弾んでよく話をされていた。足の痛みがあって辛そうにしていた人も、いろいろな話をしながら歩いた。
- ・外食に関しては、楽しさでふだん以上に食欲が湧いたように、心身の活性化という点でかなりの効果が認められた。

11) お話を聞く会

(考慮すべき点)

- ・むずかしい話を休憩なしで聞いて疲れが出た。
- ・参加者の意見をもっと聞く流れがほしかった。
- ・積極的に質問する人がいる一方で、話を聞くのが好きでない人がいる。

12) 切り貼り絵

(良い点)

- ・「幼稚園生がやっているみたいで恥ずかしい」「幼い頃に戻ったみたい」などと

言いながら、みな楽しそうに取り組んでいた。

- ・満足した絵ができた時の笑顔が良かった。
- ・おしゃべりをしながらの共同作業中はいつもより団結していた。
- ・準備作業の際、新人が手伝える機会があった。

13) 絵葉書づくり

(良い点)

- ・楽しそうで、疲労も少ない内容だった。
- ・出来上がりも満足感が高かった。

(考慮すべき点)

- ・絵が完成した後の文字入れは、一律「いろはに」だったが、自分の好きな言葉を書き入れる方が良かったのではないか。

14) カードゲーム

(良い点)

- ・童心に返って張り切ってやっている様子があった。

(考慮すべき点)

- ・ルールが少し難しすぎてわからない人が何人かいたので、もっとやさしいものを選択した方が良い。
- ・ゲームに関しては、他のプログラムに比して、好き嫌いが出てくる。
- ・罰ゲームを嫌がる人がいるので考慮すべきである。

15) 折り鶴

(良い点)

- ・少し難しかったが、みなが集中して手先を動かしていた。
- ・完成した時の達成感が高かった。
- ・折り方を自分で覚えて、家族の前で折って見せたいという意欲を引き出せた。

16) クリスマス会

(良い点)

- ・リース作りは見た目より簡単で楽しんでいた。

(考慮すべき点)

- ・ゲームが不得意な人も積極的に参加できるように、グループでやるものを取り入れれば良かった。
- ・イントロクイズは、曲数が少なかったり、良いところで曲が切れたりしたが、改良の余地がある。

17) 忘年会(茶話会)

(良い点)

- ・ゲームはチーム制なので、全員が参加できた。
- ・罰ゲームがなくやりやすかった。

(考慮すべき点)

- ・頭を使うものと、使わないものを取り混ぜればより楽しく、また、脳刺激になる。

18) 書初め

(良い点)

- ・一人ひとりの正月話に花が咲いた。
- ・一人ひとりの干支の文字（講師が書いた）と好きな字を書くという工夫された内容で、みな楽しんでた。

19) カルタとカレンダーづくり

(良い点)

- ・大きいカルタを使っていた。
- ・カレンダーの絵は節分で、季節毎に作るのが良い。
- ・一人ひとりの個性が出る。

20) 石のお雛様づくり

- ・石を使ってお雛様をつくるという内容で、意外性があった。
- ・石の形によって変化に富んだ作品ができ、楽しい作業だった。

9. 反省と今後の展望

(1) 反省

三ヵ年計画の調査研究というゆとりある期間にあって、初年度は、アクティビティ・サービスのプログラムの評価に力点を置いたので、調査内容はそれに集中するあまり、利用者個々の変化に対する観察の視点が疎かになった。しかし、調査員の参与観察において、調査されているという雰囲気を取り除くという至上命題があった。この配慮はもちろん、利用者にとって重要な意義を有する週一回かぎりのデイサービスであるからという配慮である。

調査員である短大生は2年目が卒業年度となり、一年目に築いた利用者との人間関係の上に立って、2年目は、かなり生活や内面に踏み込む調査をやり遂げなければならない。その際、今年度はできなかった個別支援計画に基づいた記録と評価が求められる。

狙いとした「アクティビティ・サービス・プログラム」の研究としては、その明確な評価基準を三人の企画立案者がもっていないため、記録は綿密にしたものの、問題点を明確に析出するまでに至らなかった。また、介護予防の視点からの必須プログラムは何かという認識がなかったため、プログラムに偏りがある。例えば、身体的機能の活性化という面のプログラムが不足していた。

(2) 次年度の研究計画

1) 次年度の研究期間

平成16年10月～17年3月（6ヶ月）

2) 次年度の研究目標

次年度は、個々の利用者の生活アセスメントを基に個別支援計画を立案し、心身活性化のプロセスを追いかけて、サービスの効果を検証する。

できれば、筋力アップのメニューをプログラムに盛り込むなど、老化防止の体系だった計画づくりが望ましい。

3) 情報収集法

- ①『利用者実態把握票』及び『生活アセスメント票』に基づく個人的な情報（初期情報、経過情報）
- ②ミニデイサービスにおいて実施されているプログラムに関する記録
- ③利用者によるアクティビティ・プログラムに対する評価
- ④「アクティビティ・ワーカー」による外部評価等

(3) 最終年度の研究目標

最終年度は、過去2ヵ年の研究成果を踏まえ、住民によるミニデイサービスの専門性と介護予防効果を向上させるため、どのようなアクティビティ・プログラムが望ましいのか、どのようなアセスメント項目で利用者の変化をとらえるべきなのか、等に関するマニュアルを作成することを目標にする。

文献

- 1) 垣内芳子〔ほか〕『アクティビティ実践ガイド』日総研出版, 2001, p.109.
- 2) 全国在宅介護支援センター編『介護予防プラン・実態把握マニュアル』全国社会福祉協議会, 2002, p. 8 - 31.